

## 没理想論争注釈稿（十三）

坂井 健

〔抄録〕

森鷗外と坪内逍遙による、近代文学史上最大の論争といわれる「没理想論争」についての注釈のうち、鷗外の逍遙への論難である「早稲田文学の没理想」についての注釈の続き。「没理想論争」については、さまざまに論じられてきたが、そうした論が細部の読みの共通理解の上でなされているかという点、必ずしもそうとはいえず、ややもすれば机上の空論になりかねない現状がある。また、注釈についても、これまでは語釈レベルにとどまり、視点も個別作家の文学論としての見方に限定されがちであった。そこで、本稿では、語句の注釈から出発して、解釈にまで踏み込

み、両者の文学論争を総合的に捉えることを第一の目的とする。さらに時代を代表する両者の論争を通して、当時の文学思潮を探り、論争の文学史に対する影響についても考察を試み、「没理想論争」を、文学史の中で新たに位置づけることを第二の目的とする。なお、底本は逍遙選集、および、鷗外全集であり、初出と照合した。

キーワード 没理想、森鷗外、坪内逍遙

### 早稲田文学の没理想<sup>①</sup>

没理想は一に没理想といひ、一に不見理想といひ、一に如是理想本来空といひ、一に平等理想といふ。其要は理想を没却し埋没して、

これを見ざらむとし、衆理想の本来空なるを説くにありといふ。これを説くものは誰ぞ。時文評論の記者逍遙子なり。

逍遙子が没却理想を説くや、一面はこれによりて造化に対するおのれが立脚点を指定し、一面はこれによりて詩文に対するおのれが平等

見を護持す。あなたは一派の形而上論なり。あなたは一系の審美学なり。<sup>5)</sup>

(1) 早稲田文学の没却理想・「しがらみ草紙」三〇号、明治三十五年三月、巻頭に「山房論文 其十一」「山房論文 其十二」として掲載。初出では「其十一」に「早稲田文学第八号」、「其十二」に「早稲田文学第九号及十号」の注が付いている。前半四分の一程までの「これを逍遙子が審美学とす。われは時文評論の無理想より立て来りたる審美学の果実を見るべき日待たんのみ。」までが「其十一」で、それ以後が「其十二」となる。逍遙の「烏有先生」に答ふは(一)、(二)が「早稲田文学」九号、(三)が十号。「早稲田文学」八号に掲載されているのは、「没理想の語義を弁す」であるので、「山房論文 其十一」は、「没理想の語義を弁す」についての反論、其十二は、「烏有先生に答ふ」についての反論と見ることが出来る。

(2) 没却理想は一に没理想といひ、一に不見理想といひ・「没理想の語義を弁す」に、「我が謂ふ没理想は、没却理想または不見理想の両義を含めり」とあるのを受ける。逍遙は鷗外の指摘を受けて、自分の言う「没理想」とあるのを受け、逍遙は鷗外の指摘を受けて、自分の言う「没理想」に両義があったことを認め、形而上的な存在である宇宙・人生の真理に対する向き合い方・態度としての「没理想」と、望ましい文芸作品のあり方・特徴としての「没理想」とを分け、前者は、自分の狭い考え方に固執せず、自由な心をもって宇宙や人生に向き合う姿勢を指し、後者は、作品から作者の人生観を忖度しがたいような作品のあり方、すなわち、読者の読み取りようで自由に作品の主題を解釈できるようなあり方を指すものとした。

(3) 如是理想本来空といひ・「没理想の語義を弁す」に「没理想といふ語は(略)更に換言すれば如是理想本来空の意なり。夫れ然り、大思想家の理想すらも、尚ほ且つ造化を掩ひ尽くすこと能はず、況んや、庸人の心に思念する所は、悉皆大造化の無底無辺の洋中に没了して跡無しともいひつべし。」とあるのを受ける。逍遙は、宇宙・人生の真理というものが、茫洋としてさまざまな解釈を許し、したがって、

人智によつては捕らえられないものと考えた。したがって、「理想」(宇宙・人生の真理)は「空」(規定することが出来ない)と言つたのである。

(4) 平等理想といふ・「没理想の語義を弁す」に「没理想は平等理想といふに同じ。我は万理想の中に就いて、其差別を捨て、平等の理を探らんとするなり。相の差別に泥まざるもの、天上天下、何れの処にか敵を作らん。万理想の平等なる所は、皆我友なればなり。理の差別を崇めざるもの何条万理の奴とならん。我が主は初めより平等(即ち唯一)なればなり。」とあるのを受ける。逍遙は、有限の人間が個人の狭い経験に基づいて得た一つの人生観に固執することを退け、無限・平等・唯一の宇宙・自然の本質と一体化することを説いた。このような姿勢は、鷗外の批判を呼ぶことになる。

(5) あなたは一派の形而上論なり。あなたは一系の審美学なり・逍遙が「没理想」について「造化に対して用ふると詩文に対して用ふるとの間に、本意に於て別を立てたり」として、「没理想」の両義を説明し直したのを受けて、言い直したものの。注(2)参照。

逍遙子が形而上論はいかに。

逍遙子は理想を没却せしむといふ。さらばその没却せむとする理想とは何物ぞ。答へていはく。個々の小理想家、個々の庸人、若くは世の見て大理想家となせる思索家が断じて、造化の心、造化の極致と定めたるものゝ名なり。かゝる衆理想の没却せらるゝことをば、無理想といひてもさし支へなしと。<sup>6)</sup>

さらば何者か他の衆理想を没却する。答へていはく。今人の智の及ぶ限にては、無底無辺無究無限の絶対なり。この絶対は即ち造化にして、其名を没却理想とすと。

さらば逍遙子が絶対はいかにしてか他の衆理想を没却する。答えへ

ていはく。衆理想は皆是なり。是れ絶対は之を納るるを以てなり。逍遙子は是なりと雖も之を崇めず。之を以て衆理想の奴となることなし。衆理想は皆非なり。是れ絶対はいづれの理想にも掩はれざるを以てなり。逍遙子は非なりとしてこれに泥まず。是を以て衆理想の敵となることなし。衆理想は即ち差別相にして、没却理想は即ち唯一相、平等相なりと。

(6) 無理想といひてもさし支へなしと。ただし、逍遙は「我が言は理想絶無、本来無理想といふとはおのづから別あり。」と断わりを付けている。逍遙は、形而上的存在を否定しているわけではなく、その解釈多様性を強調し、一つに規定することを否定しているのである。注(3)参照。

(7) 衆理想は皆是なり。「没理想の語義を弁す」に「皆是なりとは、此の無限無底の中に没すればなり」とあるのを受ける。逍遙は、宇宙・人生の真理に対する解釈は多様なものであつて、規定することができないものだから、個々の人間の抱く宇宙・人生に対する解釈は、どれも間違つたものと決めつけることは出来ない、と考えた。

(8) 衆理想は皆非なり。「没理想の語義を弁す」に「皆非なりとは、此の無限無底的を掩ひ尽くす能はざればなり」とあるのを受ける。逍遙は、宇宙・人生の真理に対する解釈は多様なものであつて、規定することができないものだから、どのような人間の一つの解釈をもつてしても当てはめて考えることは出来ない、と考えた。

おもしろきかな逍遙子が言。その人々の写象中なる衆多をして本来空に帰せしめたるは、パルメニデエスにや似たらむ。その人々の理性を衆多に属せしめて、この差別相に対する平等相を立てたるはプロチヌスにや似たらむ。

(9) 人々の写象中なる衆多をして本来に帰せしめたるは、パルメニデエスにや似たらむ。鵬外が西洋哲学史の勉強のために愛読したシユベールシュペーグラーの『西洋哲学史』(訳文は岩波文庫版、谷川徹三、松村一人訳『西洋哲学史』一九五八年改訂版、原文は東京大学附属図書館蔵鵬外手沢本による。)に以下のようにある。(パルメニデスは)「純粹な有に向けられた純粹な思考を、現象の多様性と変化とにかんする当てにならぬ諸表象に对立させて、唯一の真実で確かな認識と名づけ、死すべき者が真理と考えるもの、すなわち生滅、個物、場所の変化、性状の変転などは迷妄に過ぎないと断定してゐる」。Das auf dieses Sein gerichtete reine Denken bezeichnet er im Gegensatz gegen die trügerlichen Vorstellungen über die Mannigfaltigkeit und Veränderlichkeit der Erscheinungen als die allein wahre untrügerliche Erkenntnis, und hat kein Hehl, dasjenige nur für Nichtseiendes und Täuschung zu halten, was die Sterblichen für Wahrheit ansehen, nämlich Werden und Entstehen, vergängliche Existenz, Vielheit und Verschiedenheit der Dinge den Ort verändern und seine Beschaffenheit wechseln u. s. w. (Albert Schweiler, *Geschichte der Philosophie* (Stuttgart 1887 p.17) なお、鵬外手沢本の当該ページ、すなわち原本一七ページ下段欄外に (Alles Sein 〃 Des Absolute 〃 ヨセタル点ニ於テ逍遙子似)との鵬外による書き入れがある。鵬外が、逍遙を批判するにあつて、本書を読み直し、根拠を探していた跡がうかがえる。逍遙の論の中に、安易に超越的存在を重視し、現象世界の認識を軽んじようとする面を見いだしたのであろう。

(10) その人々の理性を衆多に属せしめて、この差別相に対する平等相を立てたるはプロチヌスにや似たらむ。『西洋哲学史』にプロティノスの主張について次のような記述がある。「真なるものの認識は、論証によつてもその他いかなる媒介によつても得られない。それは、対象が認識する者の外部にとどまつているような仕方によつてではなく、認識するものと認識されるものとの差別がまったくなくなるような仕方によつて得られる。この認識は理性の自己直観である。すなわちわれ

われが理性を見るのではなくて、理性が自分自身を見るのである。これ以外の方法でわれわれは理性の認識に達することはできない。ところで、認識のもっとも高い段階は最高の存在、万物の唯一の原理の直観である。この直観のうちでは、最高の存在と魂の分離が、まったく消失し、魂は恍惚として絶対者そのものにふれ、絶対者に満たされ照らされるのを感じる。このような神との真の合一に到達した人は、かつては愛した純粋な思考さえ軽んじるようになる。思考は一つの運動に過ぎず、見るものと見られるものとの差別を前提としているからである。このような神あるいは一者 (One) への沈潜、恍惚として絶対者のうちに融けこむことこそ、真にギリシヤ的な哲学に対する新プラトン主義の著しい特性をなしている。／B宇宙の緒原理。新プラトン学派の三つの宇宙的原理にかんする説は、以上のエノスタス説ときわめて密接な関係をもっている。かれらはこれまですでに想定されていた二つの宇宙的原理、世界靈魂と世界理性とに、第三のより高い原理をつけ加えた。この第三の原理とは、あらゆる区別および対立は究極的に統一するものでなければならず、したがってこのうちではすべての区別が克服されて本質の純粋な単純性とならなければならない。理性はこのような単純なものではない。というのは、理性のうちには、思考するものと思考されるものとの対立があり、また前者から後者への運動があつて、理性は多様なものにぞくするからである。ところで多様なものにはその始源としての単純なものが先立たなければならない。したがって、人が存在の全体を統一するものを求めるとすれば、人は理性を越えて絶対の一つであるものまで上昇しなければならない。この本源的存在をプロティノスは、第一者とか一者とか、善とか存在以上のものとか (かれによれば存在とは理性に従属する概念にすぎず、最高の諸概念と一緒に並べられるばあいには、理性と結びつけられて第二義的なものをなすものにすぎない) さまざまな名で呼んでいる。Die Erkenntnis des Wahren, behauptet Plotin, wird nicht durch Beweis gewonnen, noch durch irgend eine Vermittlung, nicht so, dass die Gegenstände ausserhalb des Erkennenden bleiben, sondern

so, dass alle Verscheidenheit zwischen Erkennendem und Erkanntem aushört; sie ist ein Schauen der Vernunft in sich selbst; nicht wir schauen die Vernunft, sondern die Vernunft schaut sich; auf andere Weise kann man nicht zu ihrer Erkenntnis kommen. Ja auch über dieses vernünftige Anschauen, innerhalb dessen Subjekt und Objekt einander noch als Getrennte gegenüberstehen, müssen wir hinaus; die höchste Stufe des Erkennens ist ein Schauen des Höchsten, des Einen Prinzips der Dinge, in welchem alle Trennung zwischen ihm und der Seele aufhört, die Seele in reiner Verzückung des Absolute selbst berührt, sich von ihm erfüllt und erleuchtet fühlt. Ist jemand zu dieser wahrhaften Einigung mit dem Göttlichen gelangt, so verachtet er selbst das reine Denken, welches er sonst liebte, weil doch dieses Denken nur eine Bewegung war, eine Differenz, zwischen dem Schauenden und Geschauten voraussetzte. Die mystische Versenkung in die Gottheit oder das Eins (εἷς), dieses Sichhinschwindeln ins Absolute ist es, was dem Neuplatonismus gegenüber von dem ächt-griechischen Systemem der Philosophie einen so eigentümlichen Charakter giebt. /b. Die Kosmischen Prinzipien. Im engsten Zusammenhang mit dieser Ekstasentheorie der Neuplatoniker steht ihre Lehre von drei kosmischen Prinzipien, Zu den zwei, auch schon bisher angenommenen kosmischen Prinzipien der (Welt=) Seele und (Welt=) Vernunft fügten sie noch ein drittes höheres Prinzip, als letzte Einheit aller Unterschiede und Gegensätze, in welcher eben darum, damit sie dies sein könne, aller Unterschied aufgehoben sein muss zur reinen Einsachheit des Wesens. Die Vernunft ist dieses Einfache nicht, da in ihr der Gegensatz des Denkenden, des Denkens und des Gedachten und die Bewegung vom Ersten zum Letzten ist, die Vernunft gehört zum Vielsachen; dem Vielsachen aber muss das Einsache vorangehen als sein Prinzip; es muss daher, wenn es eine

Einheit der Totalität des Seins geben soll, über die Vernunft zum absolut Einen hinausgestiegen werden. Dieses Urwesen nun nennt Plotin mit verschiedenen Namen; bald das Erste, bald das Eine, bald das Gute, bald das über dem Seienden Stehende (das Seiende schwindet ihm zu einem Nebenbegriffe der Vernunft zusammen, und bildet in der Zusammenordnung der obersten Begriffe mit der Vernunft verbunden nur die zweite Staffel), Namen frickichi, (p.133) とあり、鷗外手記本では「このうち」理性は多様なものにやぐするからである。「の部分に傍線が、傍線脇の欄外に「逍遙子」との書き込みがある。すなわち、鷗外は、逍遙の没理想論に、理性による現実認識を軽視し、理性を越えた絶対者とあらゆる対立を越えて一体化しようとする、プロティノスの主張に似た面を見て取っているのである。

(さかい たけし 日本語日本文学科)

二〇〇二年十月十六日受理

